広島大学高等教育研究開発センター

コリーグ

編集・発行　広島大学高等教育研究開発センター
〒739-8512　東広島市鏡山 1-2-2
TEL 082-424-6240　FAX 082-422-7104
URL: https://rihe.hiroshima-u.ac.jp

２０２６年５月

「コリーグ」59号　目次

巻頭言（１～２）Best Poster Presentation Award 受賞について（HERA2025）
（３）『第56回 IDE 中国四国セミナー・全国大学教育研究センター等協議会・広島大学高等教育研究開発センター第53回研究員集会』開催報告（４～５）留学体験記（５～７）
公開研究会開催報告（８～９）2025年度の公開研究会（９～10）センター往来（11）
新任者・離任者から一言（11～14）情報調査室だより（15）

巻　頭　言

ニーチェの「ツァラトゥストラはこう言った」を読んだ

小林　信一
（広島大学高等教育研究開発センター第16代センター長／
特命教授／上席特任学術研究員）

ニーチェの「ツァラトゥストラはこう言った」（1883）を久しぶりに読み返した。

ニーチェ（Friedrich Wilhelm Nietzsche, 1844-1900）は言わずもがな，ドイツ（正確には，プロイセン）の哲学者である。ツァラトゥストラは，もともとは，ゾロアスター教の教祖たるゾロアスターをドイツ語で発音したものと言われる。ただし，本書はゾロアスターそのものとは（名前が一緒である以外は）ほとんど関係がない。ニーチェは，19世紀末，あるいは世紀末前夜の，やや退廃的で耽美的なムードを反映して，いな反発して，本書を表したのであろう。

醍醐味は，本書の第一部冒頭の「ツァラトゥストラの序説－超人とおしまいの人間たち－」である。超人は，（神や）既存の道徳や常識に縛られず，自分自身の価値基準を自分で作り出す人間，いわば近代的人間である。「おしまいの人間」は，末人とも最後の人間とも言われる。超人に対比される末人は，安楽を求め，平等であることを望んで，「貧しくもなく富んでもいない」。「ツァラトゥストラの序説」は，その分量はわずか二十数ページ。有名な「神は死んだ」という文言もここに登場する。それはニーチェのニヒリズムを象徴する句になった。続く本編は，ツァラトゥストラの説教の遍歴を記述する長い，長い各論である。

さて，件の冒頭部分「ツァラトゥストラの序説」は，ツァラトゥストラが人々に「神は死んだ」と伝えようと，山を降りたところから始まる。ツァラトゥストラは，「おしまいの人間」の話をする。しかし，人々は，「われわれは幸福を作り出した」

No. 59

と言う。そして，「われわれをこのおしまいの人間にしてくれ！そうすれば超人はあなたにあげる！」と叫んだ。大衆は満足しきって，自己研鑽を失い，ツァラトゥストラを冷笑した。

ニーチェの筆致は，おしまいの人間たちとその心性に対する軽蔑を纏っている。

似た話は，オルテガ・イ・ガセットの「大衆の反逆」の中にも出てくる。オルテガは「慢心しきったお坊ちゃん」という。

オルテガ（ホセ・オルテガ・イ・ガセット，José Ortega y Gasset，1988-1955）は，スペインの思想家であり，文学者であり，多才な人物である。

オルテガは言う。大衆は凡庸人であり，彼らは，文明が人々の努力によって築かれ，築かれ続けなければならないものだとは思わず，自然の賜物かのごとく考える。オルテガは彼らを，（侵略する他文明ではなく，我々の）文明の中に生まれた野蛮人だと言う。

だから，「大衆人は，生は容易であり，あり余るほど豊かであり，悲劇的な限界を持っていないという感じを抱いている」。そして，「彼にあるがままの自分を肯定せしめ，自分の道徳的，知的資産は立派で完璧であるというふうに考えさせるのである。この自己満足の結果，彼は，外部からのいっさいの示唆に対して自己を閉ざしてしまい，他人の言葉に耳を貸さず，自分の見解になんら疑問を抱こうとせず，また自分以外の人の存在を考慮に入れようとはしなくなる」。

「慢心しきったお坊ちゃん」は，文明社会の野蛮人であり，生まれながらに幸福な人間である。オルテガが描く大衆人は，ニーチェのおしまいの人間と同じく現実の生活に満足し，その生活を実現する努力をする人々に対する敬意も関心もない。

こうした幸福感に満たされた大衆は，刹那主義的であり，反エリート主義的であり，反知性主義的である。

今日の世界にはこのような反エリート主義的で近視眼的な価値観や振る舞いが充満しているようだ。

トランプ大統領とその支持者たちは，反エリート主義で大学嫌いである。WOKE（“意識高い”系）は，エリートたちに対する軽蔑だ。保守的な市民の中には，リベラルアーツを，リベラル（民主党寄り）という語を含んでいるだけでけしからんと叫ぶ者もいるという。もともと，共和党支持者は科学嫌いである。2005年に刊行されたChris Mooney著の“The Republican War on Science”は，共和党の反科学的姿勢について，三百数十ページにわたり，入念に論じている。科学は共和党支持基盤である宗教的理念と対立する。また，科学は社会変革をもたらすリベラルな性格を有し，科学は科学助言やEBPM（根拠に基づく政策）を通じて規制政策の導入を支えているが，小さい政府を指向する共和党支持者は規制政策を嫌悪する，といった具合である。科学を無視し，ワクチンが自閉症をもたらすと喧伝したトランプ政権の反ワクチン政策は記憶に新しい。

反科学は，反大学にも通じる。共和党が強い州の州立大学理事会ではテニュア制度の廃止，文系学部の縮小なども起きていると言う。エリート大学への干渉も際立ち，トランプ政権と対立して，締め付けられることを恐れる大学は屈服し，自ら政府の方針に従う。（ハーバード大学のように）対峙し続ける大学は苦戦を強いられている。連邦の研究費で雇用される博士課程学生の入学定員は減らさざるをえない試練に直面している。米国の強みであり，米国繁栄の源泉を毀損するトランプ政権の反科学的，反エリート的姿勢は，近視眼的に過ぎる。

米国は「おしまいの人間」，「慢心しきったお坊ちゃん」が蹂躙する社会になってしまったのかもしれない。

さて，日本はどうか。日本でも近視眼的で，刹那主義的ムードが蔓延しているように感じる。大学に対する敬意はとうに消え失せた。大学は消費の対象となって久しい。科学の地位も怪しい。日本では，伝統的に自然であることがとても価値あるものだと考えられている。時には，自然に存在する，しかし人体には有害なものすら自然だと言って喜ぶ。科学が軽視されているのである。日本人も超人を待ち望む「おしまいの人間」，「慢心しきったお坊ちゃん」なのか。

Best Poster Presentation Award 受賞について（HERA2025）

康　凱翔
（県立広島大学特命助教／広島大学大学院博士課程後期）

2025年6月9日から10日にかけて香港大学（The University of Hong Kong）で開催された国際会議「HERA 2025 Conference（Higher Education Research Association）」において，「Gamifying Statistics Education: A Case-Based Approach Integrating AI-Assisted Design and 3D-Printed Teaching Props」と題した学会発表が，幸運にも Best Poster Award に選出された。本成果は，広島大学の樊怡舟先輩，愛媛大学の中尾走先輩との共同研究によるものである。

統計学は抽象的な概念が多く，多くの大学生にとって最も習得が困難な科目の一つとされている。私たちも統計学の授業において，学習意欲を維持しつつ，いかに多様な学力層の学生を教えていくか模索していた。そこで，「統計学に対する熱意を伝える」という中尾先輩の理念と，樊先輩の「因果推論まで教えて専門性を妥協しない」という教え方を融合させ，「ゲーミフィケーション」という枠組みに辿り着いた。ゲームの設定や知識をより直感的に伝えるために，3D プリンターを使って自ら教具を作ることにした。

これまでもゲーミフィケーションの有効性は注目されていたが，その多くはデジタル上での完結に留まり，物理的な教材制作における技術的・コスト的な壁が現場導入を阻んでいた。本研究の新規性は，AI と3D 技術を融合させることで，モデリングの専門技術を持たずとも，授業設計に合致したワークフローを提示した点にある。

具体的には，ChatGPT などの生成型 AI を用いて教材のコンセプト画像を作成し，Tripo3d.ai 等のツールで3D モデルへ変換，それを Bambu Lab A1mini などの安価な3D プリンターで出力するという一連のワークフローを確立した。これにより，高度なデザインスキルを持たない教育者でも，低コストで物理的なトークンや教材を作成可能とした。

授業後のアンケートでは，「ゲーム感覚で統計を学ぶことができて楽しかった」「授業内容がゲームと連動していて面白かった」といった肯定的なフィードバックが得られ，高い学習エンゲージメントを生み出すことが示唆された。

本研究の遂行および今回の受賞は，日頃より温かいご指導をいただいている RIHE の先生方の多大なる支援があってこそ実現できたものである。この場を借りて深く感謝申し上げたい。この栄誉を励みとして，今後もさらに面白い研究課題に挑み続けたいと思う。

『第56回 IDE 中国四国セミナー・全国大学教育研究センター等協議会・広島大学高等教育研究開発センター第53回研究員集会』開催報告

大学の「規模」と「専門性」を問い直す二日間

村澤　昌崇
（広島大学高等教育研究開発センター副センター長／教授）

少子高齢化に伴う急激な人口減少は，我が国の高等教育システムに対してかつてない変革を迫っています。令和7年2月に中央教育審議会から出された答申は，定員の縮小や大学間の連携・再編・統合，さらには地域協議体の設置によるアクセス保障など，極めて多岐にわたる施策を通じて「知の総和」を維持・向上させることを打ち出しました。こうした背景を踏まえ，令和7年8月21日から22日の二日間にわたり「第56回 IDE 大学セミナー」および「全国大学教育研究センター等協議会」「第53回広島大学高等教育研究開発センター研究員集会」を開催いたしました。

初日（8月21日）は，「大学の『規模』の適正化と大学経営」をメインテーマに据え，中教審答申が目指す高等教育システムの再構築について議論を深めました。

基調講演では，文部科学省高等教育政策室長の高見英樹氏を講師に迎え，「我が国の『知の総和』向上の未来像」と題して，制度改正の背景や設置認可の厳格化，撤退支援の制度化といった具体的な方向性が示されました。

これを受け，国立・公立・私立それぞれの立場から大学経営の現状と課題について事例報告が行われました。広島文化学園大学の坂越正樹学長，および比治山大学の宮谷真人学長からは，経営の現場から見た現状が報告されました。また，広島県公立大学法人の鈴木典比古理事長より，地域における公立大学の役割と課題が提示されました。各大学が置かれた文脈のなかで，独自色を打ち出しつつも，時には厳しい選択を迫られる大学経営の在り方について，行政と大学現場の双方向から活発な討論が展開されました。

二日目（8月22日）は，初日の議論を引き継ぎつつ，より内省的な視点から「大学経営における高等教育の研究知」および「高等教育系センターの在り方」に焦点を当てました 。

基調講演では，文部科学省科学技術・学術政策研究所の林和弘氏を招聘し，科学論的知見から「高等教育『学』」の成立や社会的有用性を批判的に検証しました。

林氏の講演を踏まえつつ，第二部では，学問として成立しつつある高等教育学が，実社会や大学現場でいかに有用性を発揮できるのか，どこまで実践と学問を両立できるのかを議論しました。現在，多くの大学で高等教育系センターが設置されていますが，近年の組織統廃合の動きは，これまでの「専門組織の必要性」という前提を揺るがしています。こうした問題意識をもとに，本セッションでは，センター群を対

象とした調査を披露しながら，高等教育「学」の専門性の再考，高等教育学の非専門家も含む混成組織としての高等教育系センターが，本部や他部局といかに建設的な対話を行うべきか，直近の中教審答申を踏まえ，大学経営の観点からセンターが果たすべき新たな役割とは何か等を多角的に議論しました。

本会合は，政府関係者，大学経営層，研究者，そして実務家が一堂に会し，高等教育の「今」と「これから」を真摯に語り合う貴重な機会となりました。二日間の議論を通じて得られた知見が，各大学における自律的な改革や，センター間の新たな連携，ひいては我が国の高等教育の質の向上に寄与することを切に願っております。

各先生方の詳しい講演内容は，『高等教育研究叢書』183号（https://rihe-publications.hiroshima-u.ac.jp/research_book/）をご覧ください。

留学体験記

経験だけは値崩れしない：ウィーン大学滞在記

劉　菡儀
（広島大学大学院博士課程後期）

昨日ようやく春の匂いを感じたと思ったら，今日は一日中雪だった。窓の外には大きな木が一本立っていて，その形がいかにも「木」のステレオタイプみたいで，樹冠はほとんど完璧な円弧を描いている。そこにはいつも真っ黒な鳥たちが群れているのだけれど，大雪の日には彼らはいったいどこへ行ってしまうのだろう。雪がやんだあとに戻ってくるあの鳥たちは，はたして前と同じ群れなのか。もしできることなら，一度聞いてみたいなあ。

ときどき，私がオーストリアで勉強していると知った人に「音楽ですか」と尋ねられることがある。「違います」と答えると，「じゃあ美術ですか。落ちたんですか」と続く。

――「いえ，落ちてはいません。」「じゃあ安心した」という具合に。

まあ，歴史ある寒い冗談というやつである。

あらためまして，劉菡儀と申します。2021年に広島大学高等教育研究開発センターに進学し，修士課程に入りました。気がつけば，もうすぐ博士課程も4年目になります。昨年，指導教員である野内玲先生のご支援を受け，他大学で交流する機会を得ることができました。そして最終的に，ウィーン大学で半年間の訪問研究を行うことになりました。いま，その滞在も終わりに近づいています。

このたびありがたいことに経験共有の機会をいただいたので，あれこれ考えた末に，この場を借りて少しばかり書き留めてみようと思います。もしどなたかの目に留まるなら，このささやかな文章が，何かのご縁になればうれしいです。

9月初め，ウィーンに着いて最初に出会ったのは，ルームメイトでした。彼女は18歳のウクライナの女の子で，ドイツ語を勉強しながらウィーン大学への入学準備をしていました。私が着いたとき，彼女は ChatGPT に「パスタのゆで方」を聞いていました。自己紹介をしてみると，30歳，社会人経験あり，博士課程在籍，中国人であり，日本の学生でもある。――そうした属性のひとつひとつが，彼女には新鮮なラベルだった。

1月23日，誕生日の日に，私は彼女にこう話した。

「あなたくらいの年齢のころ，私は30歳になるのをすごく楽しみにしていた。30歳を，自分の少女時代の終点みたいに設定していて，その頃には何かを成し遂げているはずだと思っていた」

すると彼女は，「じゃあ，二十年以上も一人暮らしてきて，一番大きな成果は何？」と聞いた。

私は言った。「料理かな。Go as a learner, come back cooked.」

Ira（右：ルームメイト）と二人

ウィーン大学の前で

10月に新学期が始まり，研究室のメンバーと初めて顔を合わせました。今回，Research fellow としてお世話になったのは，ウィーン大学 Comparative & International Education の Barbara Schulte 先生の研究室です。ゼミは週に一度，午前がディスカッション，午後がプレゼンテーションという構成でした。午前中はメンバーの論文や研究課題について意見を交わしたり，時には雑談を交えながら議論を深めたりします。午後には正式な研究発表と質疑応答が行われます。

毎回，驚くほど濃密で刺激的な議論が繰り広げられました。自分の研究を少しでも明確に伝えられるように，私は何人かの学生に個別で時間をもらい，説明の流れを一緒に練り直してもらいました。研究そのものにおいて多くの助けを得られたのはもちろんですが，それ以上に，自分がこれまで気にも留めてこなかった文化の違いによる思考のずれに気づかされたことが，大きな収穫でした。

文化の違いといえば，この研究室は比較教育の場であるため，ほとんどの学生の研究対象に，自国が何らかのかたちで関わっています。ある日，「私たちは本当に自分の国を理解しているのだろうか」という話題になりました。Barbara 先生の研究室には，一度社会に出て働いたのち，改めて大学へ戻って学び直している学生が多く，そのため研究テーマも，自分の仕事や経験と強く結びついていることが特徴的です。それに比べると，多くの留学生は，少し気まずい立場に置かれがちです。彼らは高校生や大学生の年代で別の国へ渡るため，自国のことも，留学先のことも，実のところ十分には理解していないことが多いのです。それにもかかわらず，研究に取り組む際にはつい「自国について語れる」と思い込みがちであり，ときには指導教員からもそう見なされます。しかし，自国を研究対象として選ぶことは，ある種「反駁されにくい情報差」に身を置くための戦略でもあるように思います。けれど，異なる文化の解釈のあいだで均衡を探ろうとすればするほど，自分の示す分析や見解は，ただステレオタイプを補強してしまっているだけなのではないか，という不安も生じます。果たしてそれが本当に“比較”になっているのかどうかは，改めて慎重に問う必要があるでしょう。

私自身の研究も，中国をケーススタディとしています。その意味でも，この点については今後いっそう慎重でありたいと思っています。

研究室での共通言語は英語だった。みなそれぞれに流暢に話していたが，誰一人として英語を母語としているわけではなかった。英語力そのものが「査定される対象」として前面に出ることのない環境の中で，私は，意思疎通がうまくいかない理由は，しばしば言語そのものではなく，もっと深いところにあると気づかされた。たとえば，文化の違いによる論理構成の仕方の違い，概念・定義のずれ，あるいは学問分野の違いによる着眼点の差異などです。

だからこそ，相手の言っていることが理解できないと感じたときこそ，本当の意味でのコミュニケーションが始まるのかもしれません。

10月7日　新学期のゼミ

国際週のディナー

サルトルはこう書いている――「熱心に講義を聞いているように見せようとする学生は，教師を見つめ，耳をそばだて，全精力を“熱心な聞き手を演じること”に費やした結果，結局何も聞いていない。」

実際，博士課程の学生は，こうした演技的な状態に陥りやすいのではないでしょうか。とりわけ年齢不安の強い社会では，進学にも年齢がつきまとい，就職にも年齢がつきまとう。一年たりとも迂回は許されないように感じられます。研究者になるための助走期間であるはずの博士課程は，いつのまにか単に「教育の終点」として消費されていく。この傾向は，社会科学系の分野でより顕著なのかもしれません。多くの博士学生は，ほとんど学校しか経験しておらず，その意味では理工系における技術労働者に近い側面さえあります。けれども同時に，「社会科学研究者とはこうあるべきだ」という理想像だけは高く掲げられているため，必要な（研究）技術教育が体系的に与えられることは少ないのです。その結果，教員，後輩，社会人といった周囲の期待に応えるために，名目としての博士学生たちは，ある時間において「博士学生らしさ」を演じざるをえなくなります。そしてそのことが，博士学生であることの内実を，自分自身で掘り下げていく営みをかえって妨げてしまいます。もちろん，そうした演技が短期的な利益をもたらすことはあるし，特定の社会規則のもとでは見かけ上の安定を支えることもあります。

ウィトゲンシュタインの言葉を借りるなら，「自分自身を欺かないことほど難しいことはない。」

ノーベル賞とウィーン大学
― 疑問符つきの集合肖像 ―

オスロの夕陽

博士課程の入試のとき，「博士号とは，あなたにとって何ですか」と尋ねられたことがある。
私はこう答えた。それは「パスポート（Passport）だ」，と。研究を生業とする世界へ入っていくための通行証なのだ，と。

願わくは，その通行証を手にしたとき，私が満たされるのが一枚の紙そのものによってではなく，その先に向かう場所を楽しみにできることによってでありますように。

皆さまとともに。

公開研究会開催報告

― 地政学的変動とアジア高等教育の国際化 ―

黄　福涛
（広島大学高等教育研究開発センター教授）

2026年3月9日（月）14時30分から17時にかけて，広島大学高等教育研究開発センター（RIHE）において，「地政学的変動とアジア高等教育の国際化:比較的視点から」と題する公開研究会が開催された。本研究会は，比較高等教育研究センターの企画として実施され，対面およびオンライン（Zoom）によるハイブリッド形式で行われた。当日は，大阪大学の陳麗蘭氏が司会を務め，インドネシア・ゴロンタロ大学ビナマンディリ校のアユ・ラフマン氏，広島大学の金良善氏，李昕氏，そして黄福涛が講演を担当した。使用言語は英語であり，国内外から80名以上の研究者や大学関係者が参加した。

近年，国際政治環境の変化や大国間競争の激化に伴い，高等教育の国際化を取り巻く環境も大きく変化しつつある。本研究会では，こうした地政学的変動がアジア地域における高等教育の国際化にどのような影響を及ぼしているのかについて，インドネシア，中国，韓国の事例を中心に比較的視点から検討が行われた。

最初の報告では，アユ･ラフマン氏がインドネシアにおける高等教育国際化の動向を取り上げ，日本，米国，英国，中国，中東諸国など多様な国際パートナーとの協力関係の形成過程を分析した。報告では，国際共同研究や学術交流が単なる教育・研究協力にとどまらず，各国の外交戦略，経済的利益，規範的価値観などと密接に結びついていることが示された。また，研究課題の設定や学術成果の発信において，依然として国際的な知識権力の不均衡が存在する可能性も指摘された。

続いて，金良善氏と李昕氏は韓国の事例を紹介し，地政学的緊張が大学の国際活動に与える影響について，大学関係者および留学生へのインタビュー調査をもとに報告した。多くの研究者は地政学を米中関係や地域安全保障といったマクロな問題として認識している一方，留学生の経験には，ビザ取得の困難，研究資材調達の遅延，政治的議論に関する教室内の緊張など，より具体的で日常的な影響が表れていることが明らかとなった。こうした結果は，地政学的変化が制度レベルだけでなく，大学の教育・研究活動や学生の日常生活にも影響を及ぼしていることを示唆している。

最後に，筆者（黄福涛）は中国の高等教育国際化の政策的変遷について報告した。中国の国際化政策は，1990年代以降の「グローバル統合」期，2010年代の「戦略的拡大」期を経て，近年では研究安全保障や技術競争を重視した「戦略的･安全志向型国際化」へと移行しつつあると整理された。この変化は，中国の大学が国際協力から撤退していることを意味するものではなく，地政学的環境の変化に応じて国

アユ・ラフマン氏の報告

筆者（黄福涛）の報告

際協力の形態を再編していることを示している。

研究会全体を通じて，国際化は従来のように学生移動や学術交流のみを中心とする概念ではなく，国家戦略，知識生産の権力構造，研究安全保障などが複雑に絡み合う現象であることが改めて確認された。また，多極化する国際環境の中で，アジアの大学がどのように国際協力戦略を構築していくかについても活発な議論が行われた。

本研究会は，科研費基盤研究（B）24KK0049「地政学的な変化に対応した高等教育国際化に関する比較研究」（研究代表者：黄福涛）の研究成果の一部として開催されたものであり，今後の比較高等教育研究の発展に向けて重要な知見を共有する機会となった。

李昕氏の報告

会場全体の様子

2025年度の公開研究会

＊肩書は当時のもの（敬称略）

	講　　師	テ　ー　マ
第1回 （2025/4/17）	Lena Nuechter （ユストゥス・リービッヒ大学／同志社大学客員研究員）	Who decides what counts? Employers, universities, and the negotiation of graduate employability through a sociology of conventions approach
第2回 （2025/6/8）	石井　大智（NEDO NEP）	**高等教育研究ディスカバリーシリーズ１** 人文・社会科学研究の射程の拡大：AI 上に構築された社会のクローンとはどのようなもので，何ができて，何をしてはいけないのか？
第3回 （2025/6/11）	David M. Rabban（テキサス大学ロースクール）	アメリカにおける学問の自由：理論，歴史，現代的課題
第4回 （2025/6/27）	郭　夢垚（神奈川大学） 樊　怡舟（広島大学）	**高等教育研究ディスカバリーシリーズ２** 高等教育国際化論再考：歴史研究からの要請
第5回 （2025/7/3）	三浦　崇寛（文部科学省）	**高等教育研究ディスカバリーシリーズ３** Science of Science のスコープと可能性―ビッグデータに基づいた新たな指標と見方

	講　　師	テ　ー　マ
第6回 （2025/7/24）	Jung Cheol Shin（ソウル大学）	**比較高等教育研究センター企画** 高等教育における国際的移動の政治的・経済的ダイナミクス：国際的移動に関する理論的理解の探究
第7回 （2025/7/25）	小泉　昌紀（NEC） 大林　あや（一般社団法人 WBC ラボ） 池田　亮介（株式会社 hootfolio）	大学生のエンゲージメントー大学 IR の羅針盤ワークショップ　第２弾
第8回 （2025/9/26）	Yamina Bettahar（ロレーヌ大学）	学生の国際移動：新たな動向，新たな課題～フランスの事例に焦点を当てて
第9回 （2025/9/26）	小泉　昌紀（NEC） 田村　富昭（NEC）	大学の地域連携ー大学 IR の羅針盤ワークショップ　第３弾
第10回 （2025/10/21）	陳　祖恩（上海社会科学院 / 東華大学）	戦前上海の学校体系
第11回 （2025/12/18）	藤井　基貴（静岡大学） 三宅　雅人（立命館大学）	大学の地域連携ー地域から信頼され，地域に根ざした大学になるためにー
第12回 （2026/1/6）	宇佐美　優里（東京大学大学院／芝浦工業大学）	**国際共同研究推進事業　令和7年度採択者による公開研究会** **高等教育研究資源ナショナルセンター企画** 人事採用責任者から見た大学職員の中途採用の目的と意義
第13回 （2026/1/26）	Chris Ziguras（メルボルン大学）	**比較高等教育研究センター企画** 国際教育をめぐる安全保障上の懸念への対応ーオーストラリアの経験
第14回 （2026/2/11）	Célestine Laure Djiraro Mangue（マルア大学）	カメルーンの大学における学問の自由の危機：複合的な脅威の分析
第15回 （2026/2/19）	森田　泰暢（福岡大学） 丸山　和昭（名古屋大学） 齋藤　芳子（名古屋大学）	シチズンサイエンスの実践から考える専門職としての大学教員
第16回 （2026/3/9）	Ayu Rachman （ゴロンタロ大学ビナマンディリ校） 李　昕（広島大学） 黄　福涛（広島大学） 金　良善（広島大学）	**比較高等教育研究センター企画** 地政学的変動とアジア高等教育の国際化：比較的視点から

センター往来【2025年4月～2026年3月】

＊所属は当時のもの（敬称略）

＜2025年＞

4月　Lena Nuechter（ユストゥス・リービッヒ大学／同志社大学客員研究員）

5月　なし

6月　羽田　貴史（東北大学･広島大学名誉教授）David M. Rabban（テキサス大学ロースクール）

7～8月　なし

9月　柳澤　好治（広島大学理事）Yamina Bettahar（ロレーヌ大学）

10～11月　なし

12月　小泉　昌紀（NEC）鈴木　拓人（筑波技術大学）藤村　正司（徳島文理大学）

＜2026年＞

1月　宇佐美　優里（東京大学大学院 / 芝浦工業大学）中丸　亮夫（日経新聞）佐藤　郁哉（一橋大学名誉教授）Chris Ziguras（メルボルン大学）

2月　井出　和希（大阪大学）中田　亜希子（東京理科大学）小竹　雅子（三重大学）

3月　本林　響子（東京大学）Ayu Rachman（ゴロンタロ大学）藤村　正司（徳島文理大学）
山中　敏正（筑波大学）両角　亜希子（東京大学）島田　賢也（放射光科学研究所）
蝶　慎一（香川大学）近田　政博（神戸大学）

新任者・離任者から一言

2025 年度客員研究員

林　和弘（はやし　かずひろ）
文部科学省科学技術・学術政策研究所 データ解析政策研究室 室長

このたび2025年度の客員研究員として広島大学高等教育研究開発センターにお招きいただきましたことに，心より御礼申し上げます。長年にわたり日本の高等教育研究を牽引してこられた本センターの活動に関わる機会をいただき，大変光栄に存じます。

現在，科学の営みは大きな転換期にあります。オープンサイエンスの進展に加え，AI の急速な発展により，知識の生成・共有・利用のあり方が変わりつつあります。研究成果の公開やデータ共有の広がり，AI による知識生産の変化は，科学と社会の関係を再編しつつあり，その影響は研究活動のみならず高等教育のあり方にも及び始めています。

私はオープンサイエンスを専門とし，科学の将来像を見通す研究に取り組んでおります。現在，文部科学省科学技術・学術政策研究所（NISTEP）において上席フェローとして科学技術・学術政策に携わるとともに，日本学術会議連携会員としても学術コミュニティの議論にも関わっており，アカデミアと政策を結ぶ立場からこれらの課題を考えております。

オープンサイエンスと AI がもたらす科学と社会の変容，そしてそれが高等教育に持つ含意については，「高等教育研究叢書」183号に論考を掲載しておりますので，ご関心のある方はご参照いただければ幸いです。

客員研究員として，本センターの皆様との議論を通じて，科学と高等教育の将来について考える機会を深め，高等教育研究の発展に微力ながら貢献できればと考えております。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

※2025年6月より客員研究員に就任いただきましたので，今号にてご紹介させていただきます。

2026年度客員研究員

飯田　直弘（いいだ　なおひろ）
北海道大学教育イノベーション機構　准教授

このたび，広島大学高等教育研究開発センターの客員研究員に就任することになりました，北海道大学の飯田直弘と申します。これまで日本と諸外国（主に英国）の大学入学者選抜や高等教育制度を中心に，比較教育の視点から研究に取り組んできました。とりわけ，国内外の多様な学修成果や学修歴を大学がどのように評価・承認するのかに研究関心があります。理論と実証の双方を重視し，制度設計や運用のあり方を考える点で，日本の高等教育研究を牽引する貴センターの蓄積から多くを学ばせていただけるものと考えております。皆さまとの交流・議論を通じて，研究成果の共有と発展に少しでも貢献できれば幸いです。今後ともよろしくお願いいたします。

石原　朗子（いしはら　はるこ）
岩手大学　教学マネジメントセンター　教授

この度は，伝統ある貴センターに客員研究員としてかかわる機会をいただき，大変光栄に存じます。私の専門は，教育社会学・高等教育論です。学生時代に，大学という場所の面白さに興味を持ち，研究の道に進みました。以来，社会人の学び，通信教育による学び，多様な学生の学びの保障，教育格差の解消など，目の前にある課題に取り組んできました。現在，教育の質保証に関わる立場として，大学教育研究センター群の在り方を考える重要性も感じています。大学がよりよい居場所・学びの場所となるために，センター群がどのように関われるかも考えていきたいと考えております。ご指導をよろしくお願いいたします。

田川　千尋（たがわ　ちひろ）
大阪大学　大学院人間科学研究科
招へい研究員

このたびは貴センター客員研究員の機会を与えていただきありがとうございます。仏文学出身ですが，職員として国際交流・留学生担当をしたのがこの分野との出会いです。フランスで社会学における学生論から始め，現在はフランスの高大のトランジション，大学の初年次教育をテーマにしています。フランスが掲げる高等教育は国家の使命という理念は，オープンアクセスである大学がもっとも体現していると言えます。しかしそれゆえの留年や中退，関連する社会的格差という課題に対し，大学がどのように向き合っているのか，カリキュラムや資格・能力論，と日仏各々の大学をめぐる学問的枠組みを重ね，民主的な高等教育について考え続けたいと思っています。よろしくお願いします。

古畑　翼（ふるはた　つばさ）
名古屋大学高等教育研究センター
特任助教

はじめまして，名古屋大学高等教育研究センターの古畑と申します。専門は高等教育論で，大学生の帰属意識や大学卒業生の愛校心について研究関心を持っております。少子化に伴う統廃合や地方における高等教育アクセスなどの課題に触れる中で，高等教育の意味や価値をあらためて探究していく必要性を痛感しております。そのような中で，歴史ある本センターの客員研究員を拝命し，とても光栄なことと思っております。これまで大学院や勤務先で本センターご出身の諸先輩方に大変お世話になりました。この刺激的な環境の中で多くを勉強できますと幸いです。

2026年度学内研究員

北仲　千里（きたなか　ちさと）
ハラスメント相談室　准教授

広島大学は全国に先駆けてハラスメント対応のための専任教員を配置した大学で，私はその2人目として2007年から従事しております。その他に，DV被害者支援や性暴力被害者支援のNPOの活動にも関わっています。専門は社会学で，特にジェンダー研究やハラスメントや性暴力などの「ジェンダーに基づく暴力」研究などに取り組んでいるのですが（現在は科研で「テクノロジーを悪用した性暴力やDV（TFGBV）」を研究），他方，大学での相談対応をする中で，理系の研究者の研究組織や研究業績のあり方が私たち文系とはかなり異なるものであり，それを理解しないと相談に対応できないことに気づきました。そこで，科研費をとって，理系を中心に研究のサブカルチャーの違い，論文のオーサーシップの在り方やそれとハラスメントや研究不正との関係などについても研究しています。

中山　貴司（なかやま　たかし）
未来創造人材教育機構　准教授

専門は理科教育で，これまで主に理科における批判的思考力の育成に関する研究に取り組んできました。こうした研究を通して，学習者の思考は学校段階ごとに連続的に育まれると同時に，新たな段階へと発展的に移行していくことが重要であると感じています。現在は，高等学校における学びを大学入試にどのように生かしていけるのか，高大接続はどのようにあるべきかといった，中等教育と高等教育における学びの連続性や発展的な移行の在り方に関心をもっています。また，研究は個人の力だけで完結するものではなく，多様な専門性や立場をもつ方々との協働によってこそ深まるものであることも実感しています。学校現場での25年間の経験を生かし，皆様と協力して，より実効性のある研究を進めていければと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

修了生

周　宜澄（しゅう　ぎちょう）
博士課程前期修了（2026年3月）

在学中は，専門分野の学びを深めるとともに，日本での生活を通して多くの経験を積むことができました。研究や授業では，物事を多面的に捉える力や，自分の考えを整理して伝える力が身についたと感じています。また，異なる文化や価値観に触れる中で，自立心や柔軟性も養われました。日々の学びや生活を支えてくださった先生方，友人，関係者の皆さまには心より感謝しております。卒業後は進学を予定しており，これまでの経験を糧に，今後も努力を重ねていきたいです。

斉　洋（せい　よう）
博士課程前期修了（2026年3月）

大学院に入学してから修了まで，本当にあっという間の二年半でした。この間，研究面でも生活面でも多くのことを学び，自分自身が大きく成長できたと感じています。特に，指導教員の吉田先生には，研究の進め方だけでなく，日本での生活についてもさまざまな面で温かく支えていただき，心より感謝しています。また，副指導教員の黄先生からは，論文に関して多くの貴重なご助言をいただきました。さらに，センターの先生方，職員の皆様，そして同級生の皆さんにも日頃から親切にしていただき，多くの支えをいただきました。皆様のおかげで，大学院生活はとても充実したものとなり，たくさんの素晴らしい思い出を得ることができました。修了後は神奈川県の自動車関連企業に就職する予定です。これからは大学院で培った学びを生かし，社会人としても一歩ずつ成長していきたいと思います。

新入生

河原林　友晴（かわらばやし　ともはる）
博士課程前期入学（2026年4月）

2026年度より，修士課程でお世話になります，河原林と申します。

これまで文部科学省で4年間，広島大学で1年間勤務し，初等中等教育行政や高等教育行政，並びに大学での国際戦略業務に携わってきました。そのなかで，大学組織に特殊性を感じており，国際化という切り口から，大学全体のガバナンスを研究したいと考えております。大学職員として，働きながらの院生生活となりますが，温かく大学院に送りだしていただいた職場にも還元できるよう，実務と研究を結び付けていきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

張　亜敏（ちょう　あびん）
博士課程前期入学（2026年4月）
※研究生（2025年4月入学）より進学

2026年度より博士前期課程に入学しました，中国安徽省出身の張亜敏と申します。

これまで1年間，研究生として高等教育研究開発センターで学んでおりました。先生方や先輩方，事務室の皆様には大変お世話になり，無事に進学することができました。心より感謝申し上げます。

私は2年間の就業経験をきっかけに，大学におけるキャリア教育とキャリア・ミスマッチの関係に関心を持つようになりました。また，女子の高等教育機会の問題についても関心を寄せております。これらの関心を背景に，高等教育という学問分野を専攻し，より深く学びたいと考えております。

博士前期課程の2年間においては，高等教育に

関する基礎的な理論や知識を学びながら，新たな課題にも積極的に挑戦し，自身の研究力を高めていきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

劉　雪蓮（りゅう　せつれん）

博士課程前期入学（2026年4月）
※研究生（2025年4月入学）より進学

初めまして，中国・西安出身の劉雪蓮と申します。

昨年は研究生として，櫻井先生をはじめ，多くの先生方，先輩方，そして事務室の皆様から温かいご指導・ご支援をいただき，4月より博士前期課程に進学することができました。心より感謝申し上げます。

今後はRIHEの学生の一員として，高等教育に関する多様な課題に触れながら，幅広い知識を学び，修士課程の2年間で良い成果を挙げられるよう努めてまいります。

私は，日本人大学院生の海外での学びや経験が，キャリア意識や研究活動への意識にどのような影響を与えるのかに関心を持っております。

将来的には，日本に来ている留学生や，日本から海外へ留学する学生の学びや研究を支えるような支援に携わり，少しでも貢献できればと考えております。

何卒よろしくお願い申し上げます。

陳　彦良（ちん　ひこよし）

博士課程後期入学（2026年4月）
※研究生（2025年10月入学）より進学

中国・北京出身の陳彦良（チン　ヒコヨシ）と申します。本学国際教育開発プログラムの修士課程を修了し，このたび新入生として高教研に加わることとなりました。既にご縁のある方もいらっしゃるかと存じますが，改めて何卒よろしくお願い申し上げます。日常生活では人と接することを好み，音楽にも親しんでおります。皆様とさまざまな場面で交流を重ねていけることを楽しみにしております。

私の研究関心は高等教育における国際化および学生経験にあり，近時は英語プログラムに関する検討にも取り組んでまいりました。今後はさらに多様な視点と領域へと研究を発展させていきたいと考えております。また，このような時期にあって，時艱を偕にし，皆様とともに当面および将来にわたる諸課題を乗り越え，微力ながら自己の研鑽とセンターの発展に寄与できれば幸いに存じます。

※その他，博士課程後期に坪根栄俊さんが入学されました。博士課程前期より進学のためご紹介を省略いたします。

情報調査室だより

前号でご紹介した 2024 年度開始の新企画「研究倫理・研究公正」
文献セレクション図書について再紹介します！
2025 年度は、 専門的な図書に加え、 親しみやすい文庫も追加。
コレクションは随時更新中です。 図書リストは RIHE サイト内で
閲覧できます。 リスト内の図書は貸出（相互貸借含む）も可能です。

「研究倫理・研究公正」
文献セレクション図書リスト
随時更新中

図書リスト 掲載ページ

RIHE ホームページ内、
２箇所で公開中

① 責任ある研究イノベーション・リエゾンセンター（RRI-LC） サイト

研究・倫理関連資料アーカイブ

② 所蔵検索システム

RIHE文献情報総合検索 ブックリスト

図書は高等教育研究開発センター内
情報調査査室で、閲覧・貸出が可能です

情報調査査室の利用方法等は
ホームページでご確認ください

情報調査室 HP

セレクション図書について

オンライン書店で検索して容易に入手可能なものを中心に選んでいるため、
網羅的なリストではありません。現在も適宜、追加しています。
皆様からも推薦図書をご紹介いただけたら幸いです。